

いまと、
これから。

いまとこれからの
のとつとりの
ための
ボランティア・
地域づくり・
NPOを考える
情報誌

[特集]

理解することの
難しさ、
嬉しさ。

理解することの 難しさと、 嬉しさと。

CONTENTS

【理解することの難しさと、嬉しさと。】

＊リボンをつけよう。

理解したい私の証明に。

4

【理解するためのヒント】

・多言語国際交流サポート - TIA

・困り感を抱える子を支援する親の会 / らっきょうの花

・公益社団法人認知症の人と家族の会 鳥取県支部

・特定非営利活動法人子どもの虐待防止 ネットワーク鳥取

8

【ミニコラム】

・いま、これ、ぶっく。

・今日もつまみぐい

9

9

【センターのページ】

・鳥取県 × 日本財団の話。

・センターの動き

・理事紹介「松田暢子」

10

12

13

【高校生 ing】

「藤原、部活やめたってよ」

14



人は人に理解してほしいと思う。「私は本当はこう考えているんだ」「本当はこんなこと言いたくないんだ」「私は本当はこうじゃないんだ」そうした、時には言葉に出せない部分を他人に読み取ってもらいたいと思う。だけど、現実にはなかなかそれは難しい。なぜなら、あなたはいつもそうやって、人のことを読み取れているか？と問われると、きつと多くの人が「難しいな」と思うだろうから。

それぞれの人にはそれぞれの事情があり、見た目や表情よりもたいへんだったり、苦しかったりもする。特に言葉が通じなかったり、自分が知らない事情を抱えている人に出会うとき、どうしても私たちは戸惑ってしまう。でも、それは「理解したい」という

気持ちの裏返し。相手の表に現れてない部分をくみ取って何かしたいと願う、その「理解しよう」とする気持ちや行動が私たちはとても大切だと考えています。

例えば、外国人の方や障がいのある方、自分と年齢の違うお年寄りや子どもなど、そうした相手にどうやって接していいか悩んでしまう。その時にどうするか、正解は難しいけれど、答えのヒントになることを今号では集めてみました。

「理解する」ことは難しく、でも、理解できた時、少しでもわかったり、通じ合えた時はとても嬉しい。そんな「理解する」について、まずは「理解する姿勢を表す」ための一歩から、一緒に考えてみませんか。

特集：理解することの難しさと、嬉しさと。



ホワイトリボン
(世界中の妊産婦の命と健康を守る)

白いリボンには、妊娠や出産が原因でなくなった女性たちへの哀悼の意が込められています。妊産婦や女性の命と健康を守る活動の国際的なシンボルです。
URL <http://white-ribbon.org/>



ピンクリボン
(乳がん死を減らす)

アメリカで乳がん啓発のシンボルマークとして広く使われているピンクリボン。このリボンを通して乳がんの自己検診と医療機関による検診を広める活動を行っています。
URL <https://breastcare.jp/>



イエローリボン
(障害者権利条約の実質的実現)

イエローリボンは、障がいのある人びとの、その人らしい自立と社会参加をめざします。
URL <http://www.jdnet.gr.jp/guide/yellow.html>



オレンジリボン
(子ども虐待防止)

オレンジリボン運動とは
NPO 法人児童虐待防止全国ネットワークが総合窓口を担っている児童虐待防止の広報・啓発活動です。
URL <http://www.orangeribbon.jp/>
※着用写真は表紙。



リボンを つけよう。

理解したい私 の証明に。



あいサポートバッジ
(障がいを知り、共に生きる)

あいサポーター（障がい者サポーター）は日常的にこのバッジを身につけ、気軽に手助けをしやすい環境を作るとともに、共生社会の大切さなどを広めます。
URL <http://www.pref.tottori.lg.jp/aisupport/>



グリーンリボン
(移植医療の普及・啓発)

グリーンリボンは、世界的な移植医療のシンボルマークです。成長と新しい命を意味するグリーンで、ギフト・オブ・ライフ（いのちの贈り物）によって結ばれたドナーとレシピエントの命のつながりを表現しています。
URL <http://www.green-ribbon.jp/>



Q 子どもの落ち着きがなく、思いついたら待たなしに行動するので、心配です。

☞A 子育てでこんなところに悩みがあって誰かに相談したいときは、気軽に相談してください。



Q 盲導犬を連れた人が交差点で困っているようです。どんなふうに声をかけたらいいですか。

☞A 盲導犬はユーザーの左側にいることが多いので、犬の反対側の右側から、肩などを軽くたたいて「お困りですか？」というように声をかけてください。



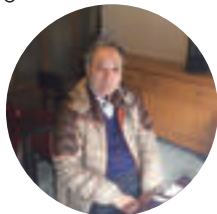
Q 英語が話せないのですが、外国人の方が困っている様子の時、なにかできることはありますか。

☞A ジェスチャーや日本語でも笑顔で応対すれば気持ちは伝わります。自分が外国に行った時のことを考えると、助けてあげたい気持ちが伝わると嬉しいものです。



Q 認知症が疑われる人が道に迷っていました。どんな声かけをしたらいいですか。

☞A 声をかける場合は、まずは自分の名前を名乗りましょう。安心してもらうのが大事です。



「I Have a Dream」。人種の隔てを超えてあらゆる人々が共に暮らす社会の到来を自らの夢として語ったキング牧師の有名な演説の中の一節です。人種差別に限らず、社会を分断している無数の「目に見えない壁」。こうした社会的障壁を取り払おうと活動を続ける団体の一つが「困り感を抱える子を支援する親の会／らっきょうの花」です。代表の齊藤里依さんは語ります。「発達障がいと診断されようがされまいが、大事なものは『その子のそのまま』なのだから、親御さんは診断にこだわらなくていい」。同じ困難を抱え、一体であるはずの親子の間にさえ生まれてしまう「目に見えない壁」。それを取り払うには、とにかく正しい知識と情報を持つのが一番の近道。毎月開催される「定例学習会」では、親はもちろん支援者にも役立つ専門的な知識を身につけるための努力が積み重ねられています。もう一つの活動の柱は、身近な悩みを共有することを目的とした「おしゃべり会。子育ての悩み、病院や教育に関する情報、将来や進路への不安などを語り合う場を設け、共感により「目に見えない壁」を消し去ろうとする試みです。

困り感を抱える子を支援する親の会 / らっきょうの花

URL <http://www.geocities.jp/rakkyou87/index.html>

「以前よりは少なくなりましたが、それでもまだ、盲導犬が入店拒否されることがあるんです」。現在鳥取県内には4頭の盲導犬がユーザーと共に生活しています。盲導犬は目の不自由な人がまちを安全に歩けるように手助けするため、特別な訓練を受けた補助犬(※)で、2003年に施行された身体障害者補助犬法によって公共機関はもちろん、デパートやホテルレストランなど、多くの人が利用する場所に一緒に出かけることが認められています。鳥取ハーネスの会は、盲導犬とユーザーのことを正しく知ってほしい、と2003年に8名のユーザーによって立ち上げられました。様々なイベントに盲導犬とともに参加して理解を呼びかけたり、小学校で子どもたちと一緒に、ともに暮らすことについて考えたりします。「もちろん、犬が苦手という人もおられますからね。とても気を使ってお手入れして清潔にしたり、毛が落ちないようにスーツを着せていたりするんですよ」。代表の森山信幸さんのご両親は目が不自由で、13年前からアイビスとライバという2頭の盲導犬と暮らしてきました。2頭は大阪の訓練所で盲導犬としての訓練をし、ユーザーとなるお父さんお母さんとの宿泊訓練などを経て、森山家にやってきました。お父さんが大好きで、家の中ではいつも甘えていたアイビスは引退し、現在は1頭の盲導犬を二人で使うタンDEMという方式をとっています。人と盲導犬が支え合って生き、その中に育まれる信頼や安心。その体験を伝えたいと、森山さんは子どもたちに読んでもらえる絵本づくりに取り組み始めています。

※補助犬は、盲導犬・聴導犬・介助犬の3種類。

鳥取ハーネスの会

URL <http://www17.plala.or.jp/tori-harness/>

TIAは、県内に暮らす外国人が安心して生活するためのサポートを行っています。大切な活動の一つは鳥取市報の英語と中国語のダイジェスト版の記事の選定。市報は社会生活を送る上での基本的な情報源です。また、2015年には鳥取市国際交流プラザの依頼を受け「とり多文化交流フェスタ」を開催しました。お互いの理解を深めるきっかけになればと企画した在住外国人と市民との交流イベントは、孤立しがちな外国人同士がつながる機会にもなっているようです。時には子育てのことで悩んでいる、というような相談を受けることもあって、生活の中で生じる様々な問題にできる限り寄り添っています。乳児健診や病院で治療を受ける際の医療通訳ボランティアとして活躍しているメンバーもいます。現場での通訳力を支えているのは、毎週欠かさず行っている勉強会。かれこれ8年以上、毎回さまざまな国の方を講師に迎え、いろいろなテーマについて英語でディスカッションしながら、楽しくコミュニケーションをとっています。この勉強会をきっかけに、仕事を見つけないことができた講師の方もいるそうで、社会との接点をつくるという役目も果たしています。「以前、講師として勉強会に招いたアフリカ出身の女性は、女性差別に対するしっかりした考えを持っておられ、その凛とした姿にとても刺激を受けました。」と代表の景下明美さん。TIAの活動は、文化の違い、背景の違いを理解しながらお互いさまで支え合う社会をつくる活動です。

多言語国際交流サポートTIA

URL <http://tia-link.com/jp/index.html>

認知症との出会いを早くする。代表の吉野立さんは、認知症になる前から正しい理解を、と呼びかけます。団体を設立して26年、「介護家族のつどい」を県内全市町村で定期的に開催、専従のスタッフが電話相談を受ける「コールセンター」の設置、「広報誌」の発行、若年認知症の人を支援するサポートセンターの設置など、認知症の人が安心して在宅を中心に暮らし続けることができる地域にするために必要な事業に取り組んできました。そして現在では、全国に先駆けて認知症の予防活動に力を入れています。米子市や江府町では住民主体で取り組む認知症予防プログラムが始まっています。一方で、老老介護の果てに無理心中を図って命を絶つてしまったという悲しい事件は後を絶ちません。現在の介護保険は本人支援の制度であり、その介護を行う家族の支援までは及ばない状況があると吉野さんは言います。「ミニコミュニケーションの障がいとも言える認知症の人の介護を行う場合、真面目に介護をすればするほど介護者に負担がかかり、ストレスを抱えてしまうことも。そのような孤立する介護者を作らないためにはどうしたら良いか。介護者はどこかにつながってほしい。そしてちよつとしたゆとりを作ってほしい。」その思いが「つどい」や「オレンジカフェ」という形になっています。介護者を支える制度作り、しくみづくりも急務です。「認知症だけでなく、様々な障がいのある人、子どもから高齢者まで、私たちは地域に混在して生きているのだから、トータルで考えなくてはけない。地域づくりの活動は、縦割りでできないのです。」

公益社団法人 認知症の人と家族の会 鳥取県支部

URL <http://ja4mya.wix.com/ninchishokazoku>



その3 「智頭の板井原ごうこ」の巻。

初冬の寒空の下、ずらりと干された小さな大根。約40年途絶えていた幻のたくあん「板井原ごうこ」になる大根です。

今回は、板井原振興会代表の原田優さんを訪ねました。その昔、智頭町板井原地区では山焼き後の土地で大根を栽培し、天日干しした後で塩とぬかで漬け込んでたくあんを作っていたそうです。これが板井原ごうこ。板井原大根は15センチ程度の大きさの大

根。この小ささと皮が厚いことによる歯応えが板井原大根の特徴です。昔は各家庭で作られ、日常的に食されていたそうですが、山焼きが衰退すると大根自体が作られなくなり、残念なことには一度はごうこも消えてしまったそうです。復活への契機は、あの味が忘れられない、という強い想い。細々と大根を作り続けていた家庭から種を分けてもらい、原田さん達の試行錯誤が始まりました。三年がかり

の挑戦でした。現在では、近隣の道の駅で販売され、地元の喫茶店でも食べることができるそうです。まさに見事な復活劇！さらにその過程全てを数人で、しかも手作業で行っているというから驚きです。保存食なので辛く、噛めば噛むほど味が出るので「二個で茶碗二杯くらいいける」と、原田さんは請け合います。



道の駅で買えますよ。



シェルター

ロイド カーン (著), Lloyd Kahn (原著), 玉井 一匡

出版社: ワールドフォトプレス ISBN-10: 4766333292 ISBN-13: 978-4766333299

1960年代、今や伝説となった雑誌『ホール・アース・カタログ』がアメリカで出版された。そこにはお金や物質による幸福とはまた別の幸せの在り方を提示する様々な記事が掲載されていた。人間の暮らしにまつわるあらゆる項目、衣食住に関するあらゆる実践的手段を見ることができたという。当時の人々はホール・アース・カタログにオルタナティブな生き方を見出し希望を持ったことだろう。今回紹介させて頂くのは、そのホール・アース・カタログの建築部門の編集を担当してい

たロイド・カーンが自ら出版した『シェルター』。この本には世界中のあらゆる民族の家について、その作り方、素材が多数の写真とともに掲載されている。どの家の素材も工業製品に頼らず、その土地で採取できる自然の素材を加工し、時にはそのまま使用されている。その様子はトム・ソーヤーが秘密基地を作る時のあのノリそのものの。僕らが子どもの時に挑んだ秘密基地作り、あのノリで世界の人々は自分たちの家を建てている。そこにはローンだとかお金だとか肩書など

といったことが一切関係ない、純粋な「家を建てる喜び」そのものが現れている。例えば、人類で一番最初に家を建てた人間は、その作る過程全てが楽しかっただろう。仕口を考えることも、土や石が建材として使えることを閃いた人間も、遊びと仕事の違いが無かっただろう。この本には、そうした人間の生きる喜びが生のまま真空パックされている。初めて『シェルター』を読んだ二十歳の頃、僕はそんな印象を抱き、自分もいつか住処を作りたいものだと思

は汽水空港という書店を経営しながら、店の裏にある3坪の、自ら建てた土の小屋に住んでいる。当時、本を読み憧れを抱いたあの生活を実践している。本は夢や憧れを抱かせる種子として、人の心に根付く。汽水空港は「人類初の書店店主の気持ち」を想像しながら経営している。その店主はきつと毎日、「この素晴らしい本をアイツに読ませてやりたい！」と考えていることだろう。



「汽水空港」
鳥取県東伯郡湯梨浜町松崎 434-18
(JR 松崎駅から徒歩 5 分)
PM13:00~20:00。火曜、水曜定休。
E-mail kisuikuko@gmail.com
URL <http://tmmate4.wix.com/kisuikuko>
Facebook <https://www.facebook.com/kisuikuko/>

特集：理解することの難しさと、嬉しさと。

自分ひとりで抱え込まずに、 だれか信頼できる人に その子を抱っこしてもらったらいんです。

虐待はよくない。でも、本人はとにかくしんどい。それをわかってあげなくては。

「虐待っていうのは、決して誰からも遠い話ではないんです。虐待死という痛ましい事件があるでしょう。それは最悪の事態ですけれど、じゃあ軽度の虐待があるのかと思ったら、そうではない。虐待がありませんかという状態と、虐待死の間には無限に段階があつて、連続しているんです。」常務理事の西井啓二さんは、虐待として現れる事象のほかに現れてこない無数の事象があつて、それをまるごと受け止める必要があるのだと言います。

平成16年に児童虐待の防止に関する法律が改正され、市民の通告の義務―学校の先生や、幼稚園・保育所の先生、医者など―子どもの虐待について気付きやすい人が、これは虐待かもしれないと思った場合には通告しなければいけないという義務となりました。とはいえ、虐待を早期発見、早期のサポートを可能するためには枠組みを超えて、社会全体で連携して取り組むことが求められています。

CAPTAは平成11年の団体設立時より、電話相談や関係機関とのネットワークの構築、その中で子どもを守るための情報共有などに取り組んできました。鳥取市や岩美町と委託契約している養育支援訪問事業ではCAPTA支援員がサポートの必要な家庭を訪問します。また現在は各市町村に設置された要保護児童対策地域協議会のネットワークの一員として、長年積み上げてきた経験や専門家等の知識を全県の担当者と共に共有して一緒に学んでいくための研修会の実施などを行っています。地域のこ

どもたちをその地域で守る、そのためにはどのような知識や力が必要で、それがどんな役割を果たすのか。それを一緒に考えましょつと呼び掛けます。実際に電話相談にどのような相談があるのかと聞きました。「鳥取県内のみが、自分の過去を振り返つて、虐待を受けていたかもしれない、と言われる方や、まさに今、子育て中の方から子どもに腹が立つて仕方がないんです、といった相談。近所の子どもがよく泣いているんです、児童相談所に相談したほうがいでしょうか、といったことなど様々な相談が寄せられています。」と事務局長の岸田さん。虐待、それは誰にでもあることかもしれない。自分を責めるのではなく、とにかく一人で抱え込まず、だれかに助けを



NPO法人 子どもの虐待防止ネットワーク鳥取 (CAPTA)

鳥取県鳥取市立川町五丁目 401 番地
Tel/Fax 0857-21-4111
E-mail info@np0-capta.org
URL <http://np0-capta.org/>

鳥取県

×

にっぽんざいだん

日本財団の話。

2016年4月から始動する「鳥取県プロジェクト」。日本財団鳥取事務所長（4月1日より）の木田悟さんにお話を伺いました。

なぜ日本財団が鳥取県でプロジェクトを？

ここ数年、増田レポートをきっかけに地方創生が話題になっています。ただ、日本財団としては、日本全体で多額の予算が付けられているけれども、本当に課題解決になりそうなモデルになるものはまだできていないのではないかと、という仮説を持っています。そこで、地方創生のトリガー（引き金、誘因）になっている少子化高齢化という事象によって発生する様々な課題に対して、こういうやり方があり得るだろうというものを、町とか

プロジェクトを行おうとしている理由です。

② どうして鳥取県で？

日本財団では約10年前から手話言語の取り組みをしています。全国で初めて手話言語条例を導入されたのが鳥取県で、その際に深い関わりをさせていただいたというのが直接的な理由としてあります。

また、地域再生のような取り組みは、お金を持ってきたからといって、すぐに効果が出るも

課題解決をしており、また、民間レベルでは企業が必要なサービスを提供していくということもあると思います。しかし、行政でも企業でもできないところがあつて、それをNPOの方が埋めようとしています。ただ、NPOだけでも限界があるところがあると思います。私の考える日本財団の社会的な機能・役割・立場は、NPOだけでも解決

と情報共有をします。もちろんデータも集めて検証しますが、きっかけとしては人ベースですね。これからも両方組み合わせながらやっていくことになると思います。最終的には職員の人間力が試されると思っています。

② 木田さん個人としては、鳥取県に移住してプロジェクトに取り組むことをどう思っていますか？

もともと登山などアウトドアが好きで、田舎暮らしに憧れがありました。自分自身はふるさとと呼べる場所もなく核家族で育っていて、同じような感覚を20代、30代の同世代も感じ、移住者の増加という流れにもなっているのではないかなと思います。鳥取に来てまだ約半年ですが、地域づくりに関わる方々と話をさせていただく中で、日々鳥取の深さを感じています。東北では水産業の復興支援に携わっていました。そこにはとてもいい素材があります。ただ、素材がよすぎるがために、それまではそれに価値をつけて売ろうという発想はなかったのだけ

③ センターに期待していることはありますか？

日本財団が鳥取県で今回のプロジェクトを行う上での強力なパートナーとして、なくてはならない存在だと思っています。既に県内各地の様々な団体とも関係性を築かれていることから、今後、二人三脚で仕事をしていくかと考えております。意欲も能力も優れた方々ばかりだと思しますので、一緒にお仕事をさせて頂けることを楽しみにしております。

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

社会の中で様々な問題に対して行政は行政の強みを持って

都市部の20代、30代は、地方をどう見えますか？私の見ている限りでの話になるのですが、企業の中で新しい

できないところ、行政も企業も手の届かない、そのすき間になっているところやこれからすき間になりそうところに入り込んで、課題解決をしていくことだと思っています。笹川会長は、「日本財団という方法」という言葉を使っていますが、その意味は、すき間を探して埋めていくということ、気付かれていない課題例えば今話題の「子どもの貧困」というテーマは、少し前まではどなたもご存じなかったと思うのですが、そのようなまだ世の中の的に知られていない問題に光を当てていくことが仕事かなと思っています。

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

理念としては、以前日本財団の顧問だった林雄一郎先生の『日本財団七つの指針』の中に「いち早く世の中の兆しを捉えて行動せよ」というものがあり、職員は日々そのようなことを考えながら行動しています。具体的にどのようかというと、実は秘密兵器があるわけではなく、地道にいろいろお話を聞かせていただきながらキャッチしていきます。スタッフ一人ひとりがいろんな方との人間関係をつないでいく中で、こういう分野ですき間ができそうじゃないか

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

都市部の20代、30代は、地方をどう見えますか？私の見ている限りでの話になるのですが、企業の中で新しい

村という単位ではなく、県レベルで社会実験としてチャレンジしてみようというのが1つ目の理由です。背景として、2011年の東日本大震災がありました。私どもも発生してからすぐに人を送り込んで、当時は宮城県石巻市を中心に、瓦礫の撤去なども含めてですね、いろいろな活動をしていたのですが、その中で思ったのは、震災の前からそもそもこの地域では高齢化が進んでいて、大震災によってその問題が顕在化したということでした。阪神淡路大震災の際も深刻でしたが、やはり孤独死などの問題が東北でも同じようにあつて、結局そこで起こっている課題というのは、20年後30年後の日本の未来だと思うのです。今は人がたくさん集まっている東京や大阪などの大都市圏も、間違いなく高齢化と人口減は今後起こってくる課題で、そのような日本全体の未来の課題に対して、何か手を打っていく必要があるだろうということが2つ目の理由です。また、日本の原風景だったり、郷土愛、日本人がもともと持っていた精神を取り戻したいということや日本財団会長の笹川は言っており、大きくこの3つが組織として日本財団が今回プロ

とっとなのみんなとこれからやりたいこと ～平成28年度とっとな県民活動活性化センター事業～

「とっとなの元気づくり会議」のネットワークを基盤に

1

日本財団「鳥取助成プロジェクト」を活用した「トットリズム県民運動」(注1)の推進

- 鳥取県の地方創生に寄与する民間主体の連携プロジェクトの立上げ・実施
- 自立した運営ができる組織づくりや次代を担う人材育成の支援(牽引型・伴走型支援)

2

社会課題解決にむけた県民参加の多様なツールの普及(活動団体の資源不足の解消)

- ボランティアの促進→社会人ボランティア(プロボノ(注2))の発掘・養成
- 寄付の促進→寄付付き商品(注3)の開発・普及
- 資金調達の支援→クラウドファンディングサイト(注4)の運営による県内の地域活性化案件の支援

3

センターWEBによる発信力の強化

- 平成28年2月にリニューアルしたWebサイトやソーシャルネットワーキングサービス(SNS)を活用した情報発信

鳥取県 × 日本財団 共同プロジェクト(総額約30億円/5ヶ年の計画)
“日本一のボランティア先進県”
～最少の人数で最大の社会貢献～

- みんなで社会を支え合う社会づくり
- 1. 中山間地域の生活支援、2. 住民参

- 加型の健康づくり、3. 難病の子どもと家族の地域生活支援
- みんなが活躍できる社会づくり
- 4. 競技場のバリアフリー化、5. タクシーのユニバーサルデザイン化、6. 働く障がい者を増やす
- プロジェクトの推進

- 7. 日本財団 鳥取人材育成プログラム “将来の担い手・リーダーを育てる”
- 8. 日本財団 鳥取助成プログラム “優れた活動の次のステージを応援”
- 9. 情報発信 “県の魅力の再発見・価値の創造”

※注1「トットリズム県民運動」…平成27年10月に取りまとめた「鳥取県元気づくり総合戦略」の基本方針に基づき、都会にはない「①豊かな自然(鳥取+ism(イズム))」「②人と人の絆(鳥取+住む)」、心豊かな暮らしを実現できる「③幸せを感じる時間(鳥取+rhythm(リズム))」といった鳥取県の強みを活かしてすすめていく鳥取県独自の地方創生のムーブメントのこと。

注2プロボノ…「公共善のために」を意味するラテン語「Pro Bono Publico」を語源とする言葉で、各分野の専門家が、職業上持っている知識・技術や経験を活かして社会貢献するボランティア活動のこと。
注3 寄付付き商品…企業等が商品やサービスを提供する際、消費者がその商品等を購入、利用することに、その売り上げの一部をNPO等に寄付する取組。

注4クラウドファンディング…群衆(crowd)と資金調達(funding)を組み合わせた造語で、製品・サービスの開発、アイデアの実現等のために、インターネットを通じて不特定多数の人から資金の寄付、出資等の協力を募る手法。

とっとなの元気づくり会議の立上げ

県内の活動団体等が互いのノウハウや課題等を共有、意見交換し、具体的な取組の実践を行う「とっとなの元気づくり会議」を、センターと県が共同で昨年11月に立上げました。

第1回 平成27年10～11月
東部65名 中部54名 西部69名 全体103名

計 のべ291名参加

【活動団体が抱える課題】

- 1. 資金
- 2. 人材
- 3. 情報発信・共有
- 4. 地域
- 5. 協働

第2回 平成28年2月
東部58名 中部33名 西部48名

計 のべ139名参加

【議論したテーマ】

(鳥取県の特徴的な3つの指標)

- 1. 豊かな自然
- 2. 人と人の絆
- 3. 幸せを感じる時間

これまでどんな活動をされてきましたか。

日野ボランティア・ネットワークの成り立ちから申しますと、2000年10月6日に震度6強・マグニチュード7.3の鳥取県西部地震が起こり、被害が大きかった日野町に、全国から当時の日野町の人口と同じくらいの約4千人のボランティアが駆けつけてくださいました。そのときまたまた私が災害ボランティアセンターの立ち上げに関わることになり、阪神淡路大震災を経験したコーディネーターの方々やボランティアの方々から多くのことを学ばせてもらいました。初めて経験した大きな災害の中で、果然としていた町民にとって、見ず知らずの人たちの温かい支援はたいへん強く復興への力となりました。そして地震から半年後の2001年4月、震災を契機に育ったボランティア精神を町に根付かせ、引き継ぐという趣旨の自主的な組織「日野ボランティア・ネットワーク」を町内外のボランティアで結成しました。

現在、鳥取県の委託を受けて「鳥取県西部地震展示交流センター」の運営を行ない、地震の経験を伝えていくと共に全国各地の災害支援などにも出かけていますが、その活動の主なものとして「高齢者誕生月プレゼント企画」を2002年4月から、現在まで13年間続けています。これは、町内に住む70歳以上の高齢者だけで暮らす方を対象に、誕生月にプレゼントを手作りして訪問し、お祝いするとともに、生活状況や困りごとを聞き、ボランティアで解決したり、ボランティアでできないことは、行政や関係機関につなげたりするものです。町内の対象者は約600人、ひと月平均50人、活動には保育園児から小・中学生、高校生、大学生や大人まで毎月30人前後が参加しています。毎月のプ

レゼントは町内のさまざまな団体や個人に協力してもらい、心をこめて作ります。この活動は毎月第2土曜日、町公民館で行っています。

ボランティアの参加者にとっては、さまざまな年齢や仕事の人達と知り合え、町内の地域事情を知る場、課題を共有する場ともなり、自分たちができるときにできることをするという「緩やかな絆」で長年続いていきます。

今後、日野町はどんな町になってほしいですか。

観光スポットもちろんいいですが、町の自然や歴史、文化に誇りを持ち、日々の生活の中の豊かさを感じられるような町になってほしいです。今いる人たちが助け合って、町を住みやすくしていき、自分たちだけでなく外の人もつながりながら、他のいいところも取り入れていけば、日野町にやってくる人も心地よいし、元々住んでいる人もできる限り町に住み続けたいと思うでしょう。日頃できている助け合いが、災害などの時にも役立つと思います。

活性化センターに期待することは何ですか。

まず、県民の皆さんに認知してもらうことです。「活性化センターがあるよね、何かあったら頼りになるよね」といった存在になるためにも、まず知ってもらうことです。ですから、いろんなところに顔を出して「活性化センターの○○さんね」と

地域の力、理想とする地域の姿は何ですか。

住んでいる人たちがデザインして、こんな町にしたいというものがどんどん出せて、そこで地域が作られていくという時代になっていくと

るくらいに地域に出て、知ってもらい、県内で何かやりたいなと思っている人たちが相談できたり、そこに行けばアドバイスをもらえたり、中山間地など隔々まで行きたるような存在になって、東部・中部・西部の事務所も風通しよくして、誰でも気軽に来られる場になるということだと思います。ボランティア活動などが活発になっていくために、いろいろな活動に県民の一人ひとりが参加できるきっかけづくりや仕掛けを、様々な人と連携をしながら作っていくといいですね。

思います。誰かが作ってくれるのではなく、自分たちがその地域を作っていくひとりになっていく、ということの小さいときから考えられる子どもたちが育っている、町に帰ってきてほしいと思っています。

松田

MATSUDA
Y o k o

暢子



鳥取県民活動活性化センター・ネットワーク

藤原、部活

高校生ing

現在進行形の高校生の
動きを紹介する

鳥取県立鳥取東高等学校（2年生）

藤原 基起 さん

やめたつてよ

今回ご紹介するのは鳥取市内の高校に通う藤原さん。

「高校生がプロデューサー。まちなかチャレンジデー」（「まちチャレ」）というイベントに関わったことがきっかけで、部活をやめてイベント後も自分たちでグループを立ち上げ絶賛活動中。

「高校生と地域をつなぐ」をキーワードに、2015年の12月に鳥取市の中心市街地で高校生が主体となって「まちチャレ」というイベントを開催しました。

イベントやビブリオバトルなどのイベントを行い、普段商店街に來ない、高校生などの若者にまちなかに来てもらおうと企画したものです。

関わるようになったきっかけは、ある日の幼馴染の友達からの電話でした。呼び出されていってみると、付箋と画用紙が置いて

ある机の前に座られ、イベントの概要についての説明もそこそこに「イベントの案を出してくれ！」と言われました。あれよあれよという間に結局「まちチャレ」の「副実行委員」までやることになりました。

中学校の時は部活以外には特に何もしていなかったですが、漠然と「自分の周りが変わることをしたい」思っていました。

なので、いい機会かと思って関わることに決めました。

高校の他の学生からは「アイツ何をやってるんだらう」って

目で見られるんですが、自分はやってよかったと思っています。「自分は何もできない」と改めて実感すると同時に、色々なことを学べました。例えば、まわりに流されずに自分の考えを持つて、かつそれをきちんと伝える必要性など、学校では学べないことを学べたり、多くの経験を積むことができました。

「まちチャレ」の後も自分たちなりに地元で何かしたいと思い、何人かのメンバーで「即興演創（そっきようえんそう）」というグループをつくりました。

自分たちがやりたいこと、楽しそうなことをやりつつ、その中で色々な経験をして、人との繋がりを広げて、「今後の自分たちに繋げていく」活動をしていきたいと考えています。

高校を卒業したら、一度は地元を離れようと思っていました。ただ、それはまた鳥取に帰ってくる前提での話です。一度外から鳥取をみて、また帰ってきた時に面白いことを鳥取で仕掛けていきたいです。



「即興演創」

<http://sokkyoenso.hatenablog.com/>
https://twitter.com/ori_more_free

【編集後記】

「鳥取県 × 日本財団共同プロジェクト」の一環で、「ボランテック（ボランティア＋テクノロジー）」というワークショップ及びプレゼンテーションの取り組みが鳥取市で開催され、共催団体として参加させていただいた。

ITの技術者（エンジニア）や学生とNPOがコラボして鳥取の街を技術で変えていくという企画。自ら選んだ社会課題ごとに集まった4～5名のグループが、お互いパソコンを突き合わせ、活発なディスカッションと2週間の期間を経て、ウェブ上に課題を可視化したり、利用しやすいアプリを開発したり…、様々なアイデアを生み出し、形にしていって！

自分の好きなことや得意技を通じて、社会参加したい潜在的なプレイヤーがたくさんいることをここでも実感した2週間だった！（毛利 葉）



いまとこれからのとつとりのためのボランティア・地域づくり・NPOを考える情報誌

「いまと、これから。」 2016年3月20日発行（第6号）

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：山根到 編集人：毛利葉 取材・編集：寺坂純子、椿善裕、谷祐基、尾崎可愛、世瀬あけみ、河上奈名子、小谷純子、小原み幸、八幡徳弘、梅野みぎわ、池淵菜美
デザイン：石原達也 写真：市川貴美江
表紙衣装協力：くらし／hahako

お問合せ：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

〒682-0023 倉吉市山根 557-1 パープルタウン 2 階

TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470

E-mail info@tottori-katsu.net URL <http://tottori-katsu.net/>